

見守りカメラで コロナ陽性認知症患者対応の質を保つ

ペイシェントウォッチャープラスの導入例

入院患者の高齢化に伴い、在宅で過ごしていた認知症高齢者が救急搬送されることも少なくありません。今回紹介する特定医療法人博仁会第一病院（群馬県）は、5年前に立ち上げた認知症プロジェクトのメンバーが中心となって、新型コロナウイルス感染症（以下、コロナ）陽性認知症患者の受け入れにあたりました。認知症、感染対策、スタッフの負担、事故対策という課題を抱え、併設の介護施設ですでに利用していた見守りカメラ「ペイシェントウォッチャープラス」が導入されました。その経緯と運用のメリットを、事務局本部長の佐藤毅然氏および認知症プロジェクトチームの皆さんにお伺いしました。

特定医療法人博仁会第一病院



院長
田村 耕成 氏



事務局本部長
佐藤 毅然 氏



総看護師長
韭澤 克美 氏



特任師長
松下 美矢子 氏



併設特養副主任
角山 透 氏

第一病院の取り組み

病院の抱えていた課題

隔離が必要なコロナ患者が環境変化を好まない認知症患者である、という対応の難しい患者の受け入れに対し、同院が抱えていた課題を伺いました。

①認知症への対応

田村: 認知症の方は環境の変化に対する恐怖や怒りの感情が暴言・暴力などの行動に繋がりがやすいため、隔離という非日常下で認知症状を進行させないで治療するためにはどうしたらよいだろうか、ということをまず考えました。隔離と見守りの両立が課題でした。

韭澤: 感染拡大でコロナ陽性患者の受け入れ要請があったときは、認知症看護に重要な、生活に関する情報が少ない状態でした。

②感染症への対応

佐藤: 患者だけでなく、治療や看護にあたるスタッフも感染から守らなければなりません。コロナ患者との接触は必要な場面に限定し

たく、訪室の機会を少なくできないかを事務方でも検討していました。回数を減らせれば、感染リスクとPPE装備の負担を軽減できるのでは、と考えました。

③スタッフの負担への対応

松下: マンパワーの少ない夜間帯、患者さんは一人ではないので、同時に呼ばれると一晩の夜勤でもかなりのストレスです。転倒・転落などでケガをして、患者の家族から「虐待ではないのか」と疑われたりすると、大変辛かったです。

④転倒・転落予防への対応

韭澤: 目の届かない病室での転倒・転落は、そのプロセスがわからないので「転ばせてしまった」という思いだけが心に残り、スタッフは疲弊してしまいます。見えないところの安全対策に悩んでいました。

導入の経緯から運用まで

□同院併設の特別養護老人ホームでもマンパワー不足は課題でした。アラームが鳴るたびに少ないスタッフで駆けつけていた当時を、特養副主任の角山氏は「シャトルラン状態で筋肉痛も」と振り返ります。この状況に対し、2022年夏からのテスト期間を経て、見守りカメラペイシェントウォッチャープラスが21台、特養に導入されました。そこでの使用実績から、コロナ陽性認知症患者の動きを把握して適切な対応ができるのでは、と病院での導入を検討し始めたのが、施設の運営にも関わっている佐藤氏。認知症患者への適切な医療を提供するスタッフの「余裕」を生み出す環境を整えようと、経営側の判断で導入に踏み切ったと言います。「一対一で見守りが必要な方に、つきっきりというわけにはいきません。人による対応に限界があるのならハード面からの環境づくりを、と考えペイシェントウォッチャープラスを活用しよう」と決めました。

様々な機器を比較・検討した結果、ペイシェントウォッチャープラ

ス導入の決め手は以下の4点でした。

- ①スベック: 発報までのタイムラグがなく、バイタルセンサーや睡眠分析も可能
- ②長時間口グ: 操作が楽で転倒原因の画像検証が容易。再発防止への検証を習慣化
- ③設置: 大がかりな工事が不要で低コスト。移動が簡単
- ④将来の機能拡張性: 顧客の意見を聞いて新機能を開発

こうして2022年の秋からペイシェントウォッチャープラスがコロナ病棟に導入されました。感染対策への習熟度から看護職員のみが従事し、夜勤スタッフを1名増員しています。カメラの常備を「見守り」ではなく「見張り」と感じる人もいるため、定期的な評価で「必要なし」となれば速やかに使用を中止することを前提に、同意を得て使用を開始。アラートはタブレットで受け、どこでも画像を確認できますが、声掛けが必要なケースには、iPadのFace Time併用という工夫をしています。

ペイシェントウォッチャープラス導入後の変化

課題① 認知症への対応

- ・環境の変化で認知症状が進行。
- ・せん妄、暴言、暴力による抑制も必要。

制限されず**病室内での行動が自由**になり、精神的に安定。抑制も不要。

- ・患者情報が少なく、個々の患者ニーズを把握したケアが提供しづらい。

録画から**生活パターンや習慣を把握**でき、その人に合った対応につながる。

課題② 感染症への対応

- ・コールすべてへの訪室によりスタッフの感染機会が増加。

画面から患者の動きを確認、**必要なケースのみの訪室**で感染リスクが減少。

- ・必要なかった訪室にも装着していたPPEの無駄。

訪室が**必要なケースのみへのPPE装備**で、適正使用。

課題③ スタッフの負担への対応

- ・コールすべての訪室により疲労度が増加。

必要性が判断でき、**訪室回数減少**に伴い疲労度も減少。

- ・虐待によるケガを疑われるなど、心理的な負担が大きい。

画像により**事実関係が可視化**でき、業務に対する**不安やストレスを軽減**。

課題④ 転倒・転落予防への対応

- ・隔離下の病室で事故の起きた経緯がわからない。

録画機能による**事故経緯の検証**により、**再発防止対策**がたてられる。

- ・スタッフの対応は、事故を防げなかった反省が中心。

事故件数減少という**成功体験**が、スタッフの前向きな工夫・提案へ。

第一病院が目指すこと

コロナ病棟での運用体験を今後活かす

「今後、コロナ以外の病棟で転用した際、患者およびスタッフの使いやすさも含めて評価したい。持続可能な方法で認知症ケアに取り組んでいくための1つの策として、このペイシェントウォッチャープラスが有効なのか引き続き検討していきたい」と佐藤氏。認知症患者の対応に困っている各病棟で、導入後どんな反応が出るの

かを楽しみにしているそうです。見守りができ、アクシデントの兆しをアラームで伝えてくれる機能を、自らの経験と重ね合わせて活用していけたら、と蕪澤総看護師長もその効果に期待を寄せていました。



博仁会 第一病院 施設概要

昭和27年、前身の中央外科医院開設。昭和39年、現在地に第一病院として移転、現在に至る。新鋭医療設備を整え地域医療の要として高度医療を実践。予防、治療、機能回復までの一貫した医療を掲げ、介護施設や訪問看護ステーションを併設し在宅医療にも注力している。病床数193床（一般病棟83床、回復期リハビリテーション病棟47床、特殊疾患病棟47床、地域包括ケア病床16床）

ペイシェントウォッチャープラス 赤外線カメラを利用した見守りロボット

- ・インターネットの使用で、室内の患者の様子をリアルタイムで画像確認
- ・録画用メモリが装備され手持ちのパソコンで再生可能
- ・患者の動きを画像から解析し、音とアイコンでお知らせ
- ・専用スタンドまたは壁面へ、取り付け・移動が簡単

